

友だちとのやりとりを楽しみながら、 自分の発想を自由に表現し、遊びを追求していく子ども

— 年少4歳児「こうしてみよう わくわくするね おまつりだ」の実践から —

1 活動のねらい

「楽しい」「にぎやか」等、お祭りのイメージを自分なりにもち、学級の友だちと一緒に、やりとりを楽しみながらお祭りに向けての遊びを楽しむ。また、自分の発想を様々な方法で表現し、友だちとやりとりすることで、お互いに思いや考えを、共有しながら広げていく。

2 保育の構想

(1) 子どものとらえ

1学期は新しい環境に戸惑い、なかなか遊びに向かっていけず、教師とのやりとりを必要とする姿が多くあった。個々の遊びのきっかけをつくっていきたいと思い、クラス全体で行う活動を意図的に設定し、はたらきかけてきた。例えば、よもぎ団子づくりを行った時に、よもぎ採りをしたことから、その後の遊びでも「おいしいよもぎをみつきたい」と、葉っぱの柔らかさの違い、色の違い、種類の違いなどを意識しながらよもぎを探す姿が見られた。また、園庭の生き物に興味をもち始めた時に、ダンゴ虫についての絵本を読んだところ、ダンゴ虫の飼い方に興味をもち、「絵本と同じダンゴ虫のお家が作りたい」と願いをもちながら、土や石、落ち葉などを集めていた。毎日水をかけたり、ダンゴ虫の様子を見たりと世話をしていく中で赤ちゃんが生まれたことを喜び、「もっと大きいお家にしたい」「友だちにも教たい」と新たな願いへとつながっていく様子があった。

2学期には運動会に向けて、自分なりのめあてに向かって頑張ることや、やってみようとするところを経験した。その中でもクラス全員が一つのチームとなる種目を楽しむことで、クラスの友だちへの意識をもち始めている。「〇〇くんもさくらさんだから。」や「お休みの人がいるからパワーが減った。明日は来るかな。」等、クラスや友だちへの意識や関心を表す言葉が増えてきている。また、友だちと一緒にすることで「〇〇くんみたいにやってみる」など、普段は自分からなかなか取り組まないようなことにも、やってみようとする姿が見られた。

このようにクラスのみんなで活動を楽しむことから友だちに思いを寄せたり、友だちから刺激を受けて、自分の力を発揮したりする姿が見られるようになってきた。

こどもまつりに向けては、友だちと一緒にやりとりをしながら遊びを楽しむよさをしっかりと経験できるようにしたい。友だちとのやりとりが増える事で、自分の思いや発想を自由に表現することが楽しいと、感じるようになってくるのではないかと考える。

(2) 本活動において求めたい姿とそのための手立て

この時期は年少4期に当たる。この期では、自分の力を試したり、遊びをおもしろくするための工夫をしたりしながら表現豊かに遊びを続けていこうとする姿や、数人の友だちとイメージや願いを出し合う、共有する等、やりとりをしながら遊ぶ姿が期待できる。

こどもまつりの活動に取り組んでいく中で、「友だちやお家の人に楽しい姿を見てほしい」「自分が考えたことを友だちにも楽しんでほしい」というように、自分の願いを強くもって遊んでほしい。

活動を構想するにあたって、こどもまつりの活動に向かってどのように子どもたちが願いをもち、

追求していくのかを予想し、「願いをもつ場面」と「遊びを追求する場面」において、それぞれ以下の事を大切にする。

「願いをもつ場面」では、楽しいことをしたい、楽しんでいる自分を見てほしい、自分が考えたことを友だちにも楽しんでほしい、という願いを引き出していく。そのためにまず、願いがもてるような導入を次のように工夫する。まず、こどもまつりは年少にとっては初めての行事であるため、まつりのイメージを固定してしまわないようにする。そこで、子どもが楽しさを感じて続けてきた遊びをいかし、子どもまつりの活動となっていくように子どもの声や姿をひろい、イメージづくりをする。次に心が揺さぶられるような“発見、驚き、感動”等の経験が出来るものと意図的に出会う活動をする。例えば実際に近所のお店屋さんに行き物をしに行くことで、店員さんとのやりとりや、お金を払うこと、店の中の雰囲気を体験する。このような子どもたちの経験を、遊びのイメージの広がりや豊かな表現にいかせるようにしたい。

「追求する場面」では、次のような子どもの姿を目指す。

- 友だちの思いを大切にし、一緒に考え、やりとりしながらおまつりをつくっていかうとする姿。
- いろいろな自然物や材料を、遊びの中に取り入れながら、発想を広げていかうとする姿。

手立てとしては次のようなことが有効であると考え。

まずは、子どもたちが遊びを十分に楽しんでいる姿や、自分の作った物、自分のしていることに満足している姿を教師が認めるはたらきかけをする。そして、満足した事から「もっと〇〇してみたい」と追求していけるよう、新たな願いに気持ちが向くような言葉をかける等の援助を行う。また、友だちとのやりとりの姿も見守っていく。遊びの場の中で自分たちのしている遊びを深めてほしいような場面では、遊びの場ごとに教師が関わりながら話し合っていけるようなきっかけをつくる。

自分の考えを伝える事や、友だちの考えを受け入れる姿などを認め、具体的に褒めていく事で、友だちとのやりとりが楽しめるようにしていきたい。そのためにははたらきかけの一つが価値語による価値付けである。価値語は以下の言葉で行ってきている。

- 1期「にこにこマン」安心して楽しく笑顔で過ごしてほしい。
- 2期・3期前半「わくわくマン」自ら楽しんで様々な事にわくわくしながら過ごしてほしい。
- 3期後半「がんばりマン」“やってみよう”“頑張ろう”の気持ちで遊びに取り組んでほしい。

4期では友だちの存在を大切にし、よさを認めながら、友だちと一緒に遊びに向かっていく姿を願い「なかよしマン」を共有していく。例えば「なかよしマンだから一緒に考えられたんだね。」等、なかよしマンでの意味付けや価値付けをしていく。

子どもたちが願いをもった時にそれを実現できるような素材を十分に用意し、イメージを豊かに発想した物を表現できるようにしたい。自然物や段ボールなどの材料で十分に遊んだ上で、作りたてい物に合わせて遊びの中に取り入れる事が出来るように、様々な素材での遊びを十分に経験できるようにする。

さらにうまくいかない事に出会うことも、自分の遊びやお祭りの活動を深めていく上で大切であると考え。偶発的におこるつまずきや失敗などから、「どうしたらいいんだろう」「こうやってみようかな」等と追求していくきっかけとなるだろう。その際には子どもの話を聞く等の援助をし、子どもが何に困っているのかを受けとめる。その上で、例えば友だちと一緒に考える事で解決していけるような時には、共有する活動で友だちに相談できるような場をつくる等のはたらきかけをしていく。

3 予想される活動の流れ

	経験してほしい内容と具体的な姿	◇願いをもつ子どもの姿・追求する子どもの姿
10月3週 ～ 10月5週	<p>○やってみたい事がみつけれられる環境の中で、遊びを楽しむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然物を集める、ごっこ遊びに取り入れる等自然物に触れる。 ・作りたい物に合わせて自然物を利用する。 ・木登りや草すべり等心地よい気候の中で体を十分に動かして遊ぶ。 <p>○発見、驚き、感動などの体験から、経験したことを遊びの中に取り入れる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・近所のパン屋さんにお買い物に行き、遊びの中でパン作りやお店屋さんごっこをする。 ・小学校の先生と段ボール村で遊び、段ボールを材料にし、いろいろな物を作る。 	<p>◇遊びの中でやりたい事をいろいろと試す。</p> <p>◇やりたいと思い自分から進んで遊びをみつける。</p> <p>◇友だちや教師とやりとりをしながら楽しさを共有し、遊びに充実感を感じる。</p> <p>◇「見て見て。」等と作った物を嬉しそうに言葉や表情で友だちや教師に伝える。</p> <p>◇経験したことをやってみたいと思い、パンを作ることや、お店屋さんごっこ等をして遊ぶ。</p> <p>◇パンの作り方を真似る、どんなパンを作るか考える、材料を選んで使うなど工夫しながら作る。</p> <p>◇自分の作りたい物の材料として段ボールを選び、いろいろと工夫して使う。</p>
11月1週 ～ 2週	<p>○こどもまつりに向かい、やりたいことをイメージしながら遊び始める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんな遊びをこどもまつりの時にするかを、意識しながら遊ぶ。 ・一緒に遊んでいる友だちと、どんなことをするかなどやりとりをしながら考える。 	<p>◇楽しい事やにぎやかな事をイメージし、やりたいことを考える。</p> <p>◇迷いながらも、自分のしたい事や、自分に合った居場所をみつけていく。</p> <p>◇作ることや準備をすることを楽しみながら遊ぶ。</p> <p>◇「こうしようよ。」「それいいね。」等と活発に自らの考えを伝える、友だちの思いを受け入れる等、やりとりをしながら遊ぶ。</p> <p>◇具体的なイメージをもち、実現できるように作る。</p>
11月3週 ～ 4週	<p>○遊びが深まり始め、どうやってみてもらおうか、楽しむかを考えながら遊ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必要な物を考えながら作る。 ・自分の遊びを友だちや教師にしてもらいながらやりとりをする。 ・園全体がまつりの雰囲気になることで、まつりをイメージしながら遊ぶ。 ・お家の人に見てもらおうことを楽しみにしながら、さらに遊びを進めていく。 	<p>◇他の友だちやお家の人にも遊んでほしい等と他者を意識しながら作ったり遊んだりする。</p> <p>◇お客さんになってもらったり、自分のしている遊びをしてもらったりなど、一緒に遊んでいる友だち以外の人とのやりとりから、「もう少し○が欲しい」等と、足りないものに気付く等の新たな願いをもちながら遊ぶ。</p> <p>◇「もっとこうしよう。」等とみんなが楽しめるような工夫をしながら友だちと一緒に自分の遊びを盛り上げていく。</p>
11月5週	<p>○こどもまつりでお家の人や友だちに見てもらえたことに喜び、満足感をもちながら片付けをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作った物を大切にしながら、整理や片付けをする。 	

4 保育の実際

9月の下旬から、少しずつ友だちを意識しながらも活発にはやりとりが出来ない姿や、一緒に遊ながらも自分の思いや考えを伝えられない姿、友だちと一緒に遊びたいがうまく出来ず、友だちとの遊びが続かない姿が見られていた。また、遊びをおもしろくしようと考えているが、うまく伝わらず、その発想を友だちと共有出来ない姿もあった。そこで、子どもたちが友だちへの興味・関心を高めながら遊べるように、「なかよしマン」の価値語を学級全体で共有し、友だちとのやりとりの場面を意図的につくってきた。11月中旬には友だちとのやりとりが次第に増えていく中で、願いを共有し発想を出し合う姿へと繋がり、自分たちの遊びを追求しながらこどもまつりへ向けて、楽しむ姿が見られるようになった。

(1)「なかよしマン」という価値語を学級全体で共有する事で、友だちへの意識が高まっていた事例

この時期、さくら組では友だちと関わりたくても、進んで思いを伝えられず、友だちとの関わりに対しては消極的な姿を見せる子どもが多かった。そこで、友だちとの関わりが見られた場面では、教師が「なかよしマン」を使い、価値付けを行っていった。

10月上旬、「なかよしマン」についての話を子どもたちに伝えた。今まで「にこにこマン」「わくわくマン」「がんばりマン」の順に、子どもの姿に合わせて価値語として共有してきた。そしてこれらの気持ちが大きくなる度に次の気持ちへと変身してきていることを伝えてきた(図1)。『「がんばりマン」が大きくなったみんなは、友だちのことも大切に、一緒に楽しく遊ぶ『なかよしマン』になって欲しい』という事を共有する活動で話した。

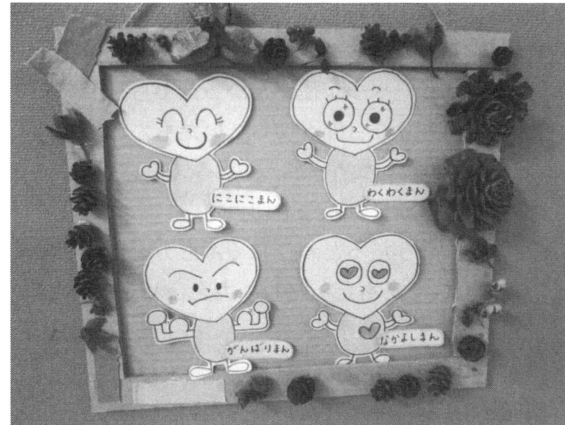


図1

10月中旬、園庭で使用する巧技台を使ってコース作りをしている時に、園児Aが一人では運べずに「誰か来てー。」「ここ持って。」と友だちを呼んでいた。園児Bがその声に気付いたが、園児Bはすでに組まれていた巧技台のコースで遊んでいたため、なかなか行こうとはしなかった。教師は、園児Bが自ら友だちの姿に心を動かしてほしいと願っていたので、様子を見守っていた。園児Aが2回呼んでも友だちが来ないので、3回目には泣きそうな声に変わった。その声の変化に園児Bは気が付いたのか、「まあ、手伝おうかな。」と言って近づいて行き、一緒に巧技台を運び始めた(図2)。まさしく、友だちの姿に気が付き、友だちを放っておけず関わろうとしている場面であったので、この姿を価値付けたいと思った。園児Bには「B君のなかよしマンが大きくなっているよ。だってA君を助けてあげたのは、なかよしマンだもんね。」と言葉がけをした。園児Aには「B君のなかよしマンが、A君を助けてくれて嬉しかったね。」と言葉がけをした。このように、初めは教師から「なかよしマン」を使うことで子どもたちへの意識付けをしていった。



図2

11月上旬、園の前庭でお弁当を食べた時、終わった子どもから、友だちとかくれんぼをして遊んでいた。その時に後から「僕もやりたい。」と園児Cが声をかけていた。鬼が隠れている友だちを見付けている途中であった為、園児Dは返事が出来ず困っていた。しかし、一緒にしていた周りの友だちが園児Dに、『「いいよ。」って言ってあげないと、なかよしマンじゃなくなってしまうよ。』と声をかけていた。それを聞いて園児Dはすぐに「そうだった。いいよ。一緒にやろう。」と園児Cに返事をしていた。教師はその場で、「みんなはなかよしマンを大切にしているんだね。」と声をかけ、その日の共有する活動でもこの話題を取り上げ、子どもたちが自らなかよしマンを意識していることを価値付けた。このように、この頃から子どもたちから「なかよしマン」の言葉が出てくるようになり、「なかよしマン」の言葉を使って、友だちとの関わりを大切にしようとする姿が、あちこちでみられるようになった。

11月中旬、子どもたちは友だちとの関わりが増え、特にこどもまつりに向かっては、自分の思い

や考えを積極的に伝える姿が見られていた。友だちが困っている時には手を貸したり、自分が楽しいと思う考えを友だちに話したりしながら遊びを作っていく姿があった。この頃はなかよしマンが学級全体に広がっており、共有する活動の話し合いの時には、園児Eが力を合わせて丸太を最後まで切った事について次のように話す姿があった。

園児E：「木が切れたことが楽しかった。」

教師：「何で楽しかったのかな。」

園児E：「丸いやつが使いたかったから。」

教師：「もう5日間も切っていたもんね。Eくん一人で切ったの？」※

園児E：「違う。みんなで切った。」

教師：「そうだったね。Fくんも力を合わせてくれたね。Gくんもだったね。力を合わせていたみんなはどうだった？」

みんな：「楽しかった。」

園児E：「みんなだったから力がいっぱい出る。どんどん交替していった。いっぱい切って交代した。」

園児H：「それは、なかよしマンパワーってことだね。」(図3)。



図3

教師は友だちと一緒にだからやり遂げられたという事にも目を向けてほしいと考え、※の発言をした。すると園児Eは、みんなで切った、みんなだったから力が出たという事を言っている。園児Hが「それは、なかよしマンパワーってことだね。」と、自分のことだけではなく、友だちの姿にもなかよしマンを意識し、友だち同士で価値付け合っている姿であった。このように子どもたちの現状や課題に合わせ、子どもたちに願う姿を学級で共有していく為に価値語を使ったはたらきがけは有効であった。

(2) 木材や自然物などの素材を取り入れながら、友だちと願いを共有し、実現に向けて表現しながら遊んでいた射的屋さんの事例

10月下旬、家庭で遊んでいた弓矢的当て遊びを園で再現し、友だちと一緒に楽しむ姿があった。子どもたちは「景品を作ろうよ」「当たりとスペシャル当たりがあった方がいいよ」等と、遊びをおもしろくしたいという願いをもちながら、景品や景品を置く台など遊びに必要な道具を作っていた。そこで教師は、子どもたちが親しんできた素材を使って自由に発想して作れるように、様々な形の木材や自然物を用意した。さらに子どもたちがのこぎりや金槌等の道具を使うことを経験しながら作ることで、作り上げた時の達成感を感じてほしいと願い、以下のような手立てを行った。

一つ目は、工業高校の生徒が手作りの木のちゃぶ台を贈呈しに来る活動で、高校生に木を切る姿を見せてもらう事である。どのようにちゃぶ台を作ったのかを知る事や、高校生の技術に触れる事で、子どもたちがイメージした物を作りたいと思うきっかけになるのではないかと考えたからである。

二つ目は、自分たちで木を切りたいと思えるように、すぐに使える長さの丸太ではなく、切らないと使えないような長さの丸太を保育室内に用意することである。

三つ目は、他の場で遊んでいる友だちにも目に留まり、やりとりの広がりへつながるよう、保育室内のなるべく中心よりに場を設定することである。

その結果、子どもたちは射的の景品がたくさん置ける台を作りたいと願い、夢中になって作っていた。初めは「足はこれにしよう。」と丸太を取り出し、台に釘を打っていた。しかし長いままの丸太では高さが高すぎて、不安定な事に気づき、「この木を切ろうよ。」と友だちと共通の目的を

もちながら、遊びを続けていった。

高校生が切っていた姿の真似をし、切りたい箇所に線を書く、切れなくなってくると木の向きを変える等、試行錯誤しながら最後まで切り続けていた（図4）。周りにいた友だちも興味を示し、「ここを持つといてあげる。」「がんばれ、1.2.1.2。」等と声をかけながら、友だちに自然と手を貸す姿が見られた。また、誰かが疲れた様子を見せると、どうしたら疲れないのかを考え、「次は僕が変わるよ。2番は〇〇くんね。3番は〇〇くんね。」と順番を決め、友だちと交替する姿があった。また、どれだけ切れたかを確認するためにのこぎりの出ている部分を触り、深さを確かめる等、「この木を使って射的の台を作りたい」という願いへ向けて、素材をいかし思いを表現していく子どもたちの姿が見られた（図5）。

1本の丸太を切る事に5日間かかったが、友だちと願いを5日間もち続け、共有しながら実現していこうとする姿であった。



図4



図5

5 おわりに

価値語を使い、自分の考えを伝える事や、友だちの考えを受け入れる姿を認め、具体的に褒めていった。それにより子どもたちに、思いや考えを共有したり、発想を表現したりする姿が現れていたため、価値語のはたらきかけは有効であった。

また、その事により、友だちとのやりとりが増え、友だちと心がつながることで、お互いの発想が広がり、素材を生かして表現することや遊びの追求へとつながっていくことが見えてきた。

子どもたちが表現力や友だちと関わる力を発揮するためには、子ども自身の願いが明確になることが必要である。そのための教師の「問いかけ」等のはたらきかけが有効であることがみえてきた。今後、有効なはたらきかけを、実践を通して明らかにしていきたい。（文責 金崎 沙耶香）